

「家がいいね」 第5号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2004.10.8

今号は、感じるままのメモ書きです。

「天災は忘れた頃にやってくる」との寺田寅彦さんの有名な言葉があります。今年は、繰り返し上陸する台風のほか、9月始めの地震。局地的な豪雨災害など、身をもって体験する自然の怖ろしさが、忘れられないという人が結構みえます。

動かないはずのものが揺れるのが怖い

地震の揺れを最初に体験した後、かすかな揺れでもハツとして緊張が取れない、あるいは寝られないと言われます。元々の相談も、先の不安が頭から去らない方々でした。揺れる怖さの一人の人間での体験は「めまい」に当ります。地震体験を個人で抱えすぎる人は、「めまい」と同様に不安のブランクを漕ぎすぎるのでしょうか。地震の怖さも他の人との共通体験と思う人では、次第に振幅も下がるようです。

災害と人のこころ

水害の避難勧告の調整で、疲れきってしまったと言われる方もいました。生活の場から「避難する」「避難しない」「その説得をする」は、互いにとって真剣な問題ですが、災害以上に人の対応の違いが、あぶり出された面もあります。心身の問題で移動が困難な高齢者が、結局は自宅に残る道を選んだとすると「防災」は自己責任だけでは出来ない問題も、はらんでいるのではないかと思います。

文明が進むほど災害は増加する？

文明が進めば、災害を封じ込めることが出来る、と思っていないでしょうか。人は地震や台風の強大なエネルギーを左右できません。それでも人間は、少しでも便利なようにと、今までは考えられなかった所にも自然の改造の手を加えています。一度災害が起これば、人命以上に、毎日の生活のライフラインをそこそ脅かされてしまうのです。

「天災は忘れた頃にやってくる」とは？

人間も動物と同じで何度同じ災害にあっても決して利口にはならないものだ。草刈鎌で追われた虫が、先の茂みで落ち着き、又々追われる光景から、短い記憶が反射的な動作しか虫は持たないのかと考える。しかし火山の爆発で全滅した数年後に再び同じ所に集落ができた話から、寺田寅彦は人間が虫の短い記憶を笑うことは出来ないと言語。そしてむしろ先人のほうが、災害が起きてしまった後への対処を心得ていると言いました。つまり



自然は変わらない、人が変わるのが問題

そういう警告であり、平時にあつて最も問題になりそうな人間の過ちを点検し、避けられない天災の時にも人災の部分を極力防衛しておかねばならない事と、私は受け取ります。

寺田の「防災」の意識は、ちようど障害が起きてからのバリアフリーと、健常時も視野に入れたユニバーサルデザインの考え方にも対比されて、興味深く思えます。



2枚目の度会橋下の写真は、撮影者の目の高さまで昨日は水位があつたらしい。半日で一気に引いた川幅はそれでも通常の数倍でした。遠くに虹が見える光景が、自然は変わらないとも言つよつでした。



いせ在宅医療クリニック
自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県度会郡御園村高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
mail homecare@kr.tcp-ip.or.jp
HP <http://tcp-ip.or.jp/~takuro>